

【研究ノート】

『丁巳蝦夷山川地理取調日誌』におけるオオウバユリ食用記述とその周辺

—記述の分析による調理および食用状況の把握—

若林和夫

はじめに

本稿はアイヌ文化の植物利用がどのような家族構成、生活状況の下でなされ、どのような利用方法をとったかを、近代例の援用からの復元的解釈ではなく、近世史料からの分析から考察することを目的とする。

そこで、本会誌創刊号掲載の拙論に続き（若林 2005:37-52）、松浦武四郎（以下、武四郎）の著作『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』（以下、『丁巳日誌』）に記載のオオウバユリ食用例13件を紹介する。その上で調理方法、調理を行った状況、調理をした人物の性別や年齢、家族構成などの基本事項を整理、分析し、具体的に安政4年（西暦1857年）のアイヌによるオオウバユリの食用について言及する<sup>1</sup>。

また前回同様、記述には天塩から名寄周辺地域と旭川、深川を中心とする地域の2つの極が存在する。しかし、比較材料に乏しいため、以下まとまりとしてわけられる場合もあるが、地域差については言及せず、全体のデータ提供と分析のみを行う。

なお、本稿では『丁巳日誌』の秋葉実氏翻刻からの引用を、「秋葉翻刻」と呼称する。また、全体の情報をわかりやすく示すため、末尾に表を付した。地名の重複がある場合は、「十二\_49チノミ」などと巻数と丁数を加え区別する。

I 『丁巳日誌』に含まれるオオウバユリの食用関係記述

1 石狩川上流域の記述

ではまず、13件を「1」と「2」において紹介する。なお、以下引用では特に断らない限り、秋葉翻刻文の下線は論者による。

はじめは、「第五卷再篤石狩日誌 卷の三」安政4年5月24日、1857年6月15日の宿所、ベツバラでの記述である（秋葉翻刻：233-235）。

ベツバラ

（中略）

上陸して宿す。其家は去年召連しシノロ乙名エンリシウ五十九才の家なるよし。然しエンリシウは当春死去したる由にて、家には妻カトアンテ五十才と三男シユケシアイノ十四才、妹タマアンテ九才三人にて、エンリシウの母タマルコ七十四才と云盲目の母を養ひ居たり。

（中略）

扱、其よりトミハセ、ニホンテ、アイランケの二人を薪取に遣し、一背負い計ヅ、式軒え遣し置、夜に入酒を一同え振舞遣わしたるに、又此家よりもトレフを煮て我に出し、其隣よりは鱒の焼きたるとキトビルを煮て我を招きて振舞たるも、実に其素朴なることかんずべし。

翻刻上段注記によると、妹背牛橋の北に位置する（秋葉翻刻：233）。

この次に出てくるのは「第六卷再篤石狩日誌巻の四」、安政4年5月29日、1857年6月21日に当る（秋葉翻刻：276-277）。記述はベ、ツプトにある。

扱其夜はクウチンコロ家迄下り止宿するにトマ、トレフ、アンラコロ等を煮て出し饗応致し呉る。

紹介のようにクウチンコロの家まで行っており、内容自体はフシコベ、ツのものである。翻刻上段注記には同家は美瑛橋の付近とある（秋葉翻刻：269）。

次は、「第六卷再篤石狩日誌巻の四」安政4年閏5月朔日、1857年6月22日のホロソウに記述がある（秋葉翻刻：283）。

是よりシリコツ子家え寄りしが、トレフ餅等をこしらへ出し、一同え振舞、其鍋の跡にてアイノの茶と云て何か木の皮を削り煎じ吞せしが、少し香有至極よろしくみえけるなり。

内容から、シリコツ子の家まで行っていることがわかる。同家はベツチウシにあることから、「トレフ餅」を食べたのは同所である。なお、ベツチウシは翻刻上段注記に神楽橋付近とある（秋葉翻刻：277）。

次へ移ると、同巻の安政4年閏5月3日、1857年6月24日のホンメンの記述である（秋葉翻刻：286-287）。

ホンメン

（中略）

シリアイノ家より又トレフを煮て一同え振舞けり。

翻刻上段注記に現在の旭西橋付近とある（秋葉翻刻：286）。

次に、「第七卷再篤石狩日誌 巻の五」の安政4年閏5月4日、1857年6月25日、アサカラの記述である（秋葉翻刻：305-306）。

アサカラ

右の方相応の川也。川口市十式三間、急流にて水よろし。

（中略）

別にシヤウンテ九才と云女の子が有（タマルキ娘よし）けるに、帯の上にべたる布二尺を解て相与え、其ニホウンテが此間より我が来るを待得居て用意せしと云まゝ、纔時休らひて、アンラコロとトレフとを煮てチエトヒを入れてねりし食物等を振舞はれ、病に苦みけるタサウリ能く暇をつけて出立しけるに、（省略）。

ここは翻刻上段注記では、永山の付近という（秋葉翻刻：305）。

次は、「第九卷再篤石狩日誌 巻の七」安政4年閏5月19日、1857年7月7日のハンケホロナイでの記述である（秋葉翻刻：381-382）。

ハンケホロナイ

(中略)

扱、此処にて一同昼飯して下るにシリアイノは笹原を分て入行、是より水夫三人なるに追々水勢も穏に成難場も無成しが、船は其故是迄より暇取けるが、夕方懸て川口えぞ出、是より一里計りも凡トツクまで有るを棹さし上るに大に暇取、五ツ前とも思ふ頃にセツカウシが家え帰着しぬるに、セツカウシ、イレンカハシ等鱒を多く取置て、さまざま僕共にも振舞呉、我にはまたトレフを煉て出しけり。

翻刻上段注記では班溪幌内とされ、その川口の上流の徳富、トツクでの食事という（秋葉翻刻：382）。食用に関しては「煉る」という。

## 2 天塩川流域の記述

次に「第十一卷天之穂日誌 卷の二」安政4年6月12日、1857年8月1日のトンベツホでの記述である（秋葉翻刻：502-504）。

トンベツホ

(中略)

病氣にて久敷平臥し居て、未だ嫁をもとらざると。其次弟クウアツと云は廿六才近頃エカシテカニの娘リヨンテを娶、兄や老親の介抱を致し居りしが、是もまた浜え下られ、依て此家には老人夫婦とサケノと云病人計なりけり。然るに召連しトセツの妻ヤ、と云は、此サケノの妹なる由にて有しが、トセツの子ホントセツ三才と云を此家え預け有たり。またエカシテカニの妻もカニへと云子供老人を連れて此家え遊びに來り居たり。夜は我にトレフ餅を出し、また欸冬とアンラコロを煮てチエトイを接え鱒の卵を入れて、彼去年北地にて処々喰たるもの等を出し一同え振舞呉たりけり。

ここは翻刻上段注記から、箴島の鬼差辺周辺のような（秋葉翻刻：502）。

武四郎はチエトイ（食土）を混合したフキとアンラコロを煮たものに「北地」つまり、サハリンで食べたもののイメージを重ねる。

次に、「第十二卷天之穂日誌 卷の三」安政4年6月14日、1857年8月3日の記述である（秋葉翻刻：下巻65）。

ヲクルマトマナイ

(中略)

其七、八、九、十の四人は未だ懐か背中に有るなどする者計にて、只呑み喰ふて母の腰に止まり歩行のみ也。其憐れさ如何とも致し難し。依て先一同え粥を煮て振舞はんと大鍋にて一杯煮けるに、此処の子供等は、未だ粥を喰せし事なしと。依て少しのトレフと鱒の卵を入度由申に附、入候様申附しかば、如何にも鍋は平日魚類獣肉のみ煮る鍋にて油出たるに、一端は鼻坑を衝きて如何とも致しがたく思いしに、是も皇国の民の喰物に訓ると訓ざることなるべし。

ここは翻刻上段注記に、温根内の小車とある（秋葉翻刻：下巻65, 122）。調理は、粥にト

レフと鱒の卵を入れている。

次に、同巻の安政4年6月14日、1857年8月15日のチノミでの記述である（秋葉翻刻：下巻81-82）。

#### チノミ

此処赤壁崩の下少しの砂浜有。上高みにて水乗らざる処也。依てむかしより人家有る由なり。當時も壱軒有。家主はエレンカクシ六十九才、妻エヌンベケレ五十八才、倅クウサンケ廿六才、嫁トサエビタ廿才、其子サヌレマツ五才、と妹ヲマシニ才と、其に彼昨日逢しラフニ三十九才、妻エトタン廿七才等合宿せし由。然るに家主は当ナヨロの乙名の事なれば浜え下り、其倅と其孫四人も浜え下り、ラフニの妻も雇に下られ居るよしにて、漸々此家主の婆エヌンヘケレと、当年は病気のよしにてラフニと二人残り居る計なり。然るに此家は少し大きくして、先此ナヨロにては第一番の暮しの由なり。其兩人えの土産遣わしたる処、我には召連るものにも皆トレフ餅を出し振舞、いと丁寧に世話致し呉ぬ今日の道凡七里半。

同地は、翻刻本の付属地図によると名寄川口より数里上ったところにある（小林 2001（1982））。

また、同巻安政4年6月18日、1857年8月7日にも訪れている（秋葉翻刻：下巻88-89）。

チノミのエレンカクシの家え着しぬ。左候や婆とイソマの娘と兩人にてまたトレフ餅を作り出し、又フイといへる草の根を湯上、其傍に鱒のハラを置いて我に出しぬが、其味至て淡薄にて妙なり。其傍等見廻すに、此ラムニが細工とて木烟管が作りて有しまゝ、是ぞ今少し長くんば背を搔に宜しけるべしと、背の半風子を搔いて見せしかば一同に笑を含みて別れたり。

次は、同巻安政4年6月18日、1857年8月7日のナイフトの記述である（秋葉翻刻：下巻89）。

ナイフトのアヘルイカが家に着しぬ。然るにアエリテンカ、トセツも昨朝下りて此処にて休息しぬが、又此家にもフイを煮て出し、スケロク家よりはニホとトレフを煮て一同え呉、我えは鱒を一本持来り呉ぬ。扨夜に入りて一同伏せしと思ひ居たりしが、其妻は何処え行きしや見えぬ。

ここは翻刻上段注記に、名寄川口とある（秋葉翻刻：下巻65）。

次に、「第十三巻天之穂日誌 巻の四」の安政4年6月24日、1857年8月13日のヲクルマトマナイの記述である（秋葉翻刻：下巻122）。

左候哉、一同悦び迎え、先川上の様子を聞等致し呉、召使し者えもいと懇懃に挨拶をぞ致しぬるが妻は我を待受てトレフを晒し居、トワンヌは此間より我が帰るをまちて鱒を多く焼きて置し由なるが、今夜も先焼鱒とトレフにて一同振舞はれ（省略）

この例では若干準備の様子がうかがえる。

さて、最後に同巻安政4年6月29日、1857年8月14日のヲニサツへの記述である（秋葉翻刻：123-124）<sup>2</sup>。

四ツ過にも成るや空霽れたり。西風起り来りし故に未だ雨気も消不レ去、蚊虻甚く責られ責られ下り行に、八ツ半頃にヲニサツへなるトキノチ家え着しぬ。

然るにアヘシナイよりイソカといへる爺も遊に我を出迎がてら来り居たり。然る処外よりトキコサン壺人走り来りて、此川向え三才計の熊出たる由を申来りける故に、ソラと云より召連候土人等四人に、イソカ、サケノ、トキノチ七人が家の犬を舟に載せて追駈行しが、七ツ頃と思ふ頃に一頭の熊を取来りぬとて、窓先え其を置て我に其始末を話し、見よと申まゝ、此方へ持来れと申せしかば、窓より見て呉よと其振をぞ申まゝ是を見るに、三才計なるか。扱其よりトセツとトキコサンは皮を剥ぎ、イソカ、トキノチは幣を削りて、妻ケセ、とサケノはトレフ餅を拵え、アエリテカンとエコレフは木を切て此皮を張らんと其支度して、皮また骨肉共に窓より家え入、上に図する如く鑄りて祭り、皮をまた窓より外え出して是を張り、其悦び限りなし。

依て我が持下りし残樽を相与えしが、其酒とトレフ餅を前に供えて居合土人など順々に押し、何事かはしらざれども囁々と唱て押するに、其訳は、今日爰に土人等に取られしは、江戸よりニシハも来り、能き酒をば供えてもらひ嘸うれしかろう、と云よしなりけり。

13 件の中でも、儀式に関する部分が興味深い。

## II 馳走になった人々

### 1 石狩川流域の同行者

以上の引用では、武四郎に同行した人物が明確ではないため、確認を行う。

最初の同行者は、第3巻3丁の石狩運上屋で選定され「トミハセトツク小使セツカウシトツク乙名ニホンテ上川アイランケ上川の四人を支度させ」（秋葉翻刻：158）とあり、この4人が同行する。ここで借り受けようとしたアイヌにはもう1人イワンハカルがいて、場所側に拒否されるが、ホンメンの手前で同道している。

旭川周辺へ到達後、第6巻3丁末から4丁で「明日はチユクヘツの方見聞の儀申聞きし、右水夫には、先召連候四人は休息申附置、乙名クウチンコル、同シリコツ子、ハリキラ、イナヲアニの四人と相定む」（秋葉翻刻：268）とし、案内を交代。第6巻22丁では「用意の品々船に積て掉上るに、如何にも水勢はげしければ、此処よりイソテクも同船致し候間」（秋葉翻刻：279）とし、船を引くため、フシコチユクベツに住むイソテクアイノを連れる。そして、第6巻29丁直前でフシコチユクベツに戻った際「イソテク我にトマー連とアマホウの弓一張、矢二本を呉る」（秋葉翻刻：282）として、下船。このことからホロソウ、ベ、ツフトは同じ人物が馳走を受けている。

次に第6巻32丁末から33丁において「上川行水夫の儀、ビヤトキは上川すじ工者の者と聞に附、（中略）此者を水先致し候様申附、次に乙名シリアイノ、イワンハカル、トミハセ等四人と相定め」（秋葉翻刻：285）とあり、ホンメン、アサカラも同様である。

さらに、第7巻45丁では「イハンハカルえ米五合を与え是より帰し遣すに、明日より浜え

下る役割をぞクウチンコロ、セツカウシ、トミハセ等相定るに」(秋葉翻刻：324)としたがトミハセが病となり、「依て、此処より下りウリウえ行候間はセツカウシを遣ふべし」(同上)とし、「其外ウリウフトネリコツウシが出居候はゞ、此者こそウリウの産なれば、是とタヨトイ、クウチンコロを召連れるべし。其よりソラチ方えはトミハセ其間に快気も仕候はゞ、トミハセとニホンテ、クウチンコロ、タヨトイを召連行べし」(同上)とした。

この後、第7巻46丁でクウチンコロは一時休息(秋葉翻刻：325)、同行者はトミハセ、セツカウシ、シリアイノとなる。次の第8巻2丁からは「タヨトイ、ニホンテの兩人はヒシルエ婆とヤエコエレカ婆の在る家を尋に遣はせしに」(秋葉翻刻：337)とあり一時タヨトイ、ニホンテも同道する。ここで、第8巻6丁で不在のリコツウシは「未だリコツウシは、此間山え入りしより帰り来らざる由聞し」(秋葉翻刻：339)と居らず、同巻同丁でトミハセを休息させ、「左候はゞ明日はセツカウシとタヨトイ、シリアイノ、ニホンテの四人を召連」(同上)でのウリウ調査となった。

そして第8巻末から第9巻冒頭でセツカウシの家に宿泊、彼に暇を取らせ、第9巻1丁から2丁で「是よりトミハセとシリアイノ、タヨトイ、ニホンテの四人をぞ水夫に命じて」(秋葉翻刻：367)出立。セツカウシから馳走を受ける。直後の第9巻33丁からはトミハセ、セツカウシを帰郷させ、「是よりタヨトイ、ニホンテの兩人にて下るに」(秋葉翻刻：383)という。そのため、クウカルウシ同行は、セツカウシ、トミハセ、シリアイノ、ニホンテの4名である。

## 2 天塩川流域の同行者

では、天塩川流域についても見ていく。

まず、第11巻4丁において「ナヨロ土人エコレフ、同トキコサン兩人を乗せ、余は別に小船にてシヘツ小使アエリテンカ、同船頭小使トセツ兩人乗せ出船するや」(秋葉翻刻：476)とし、最初の同行者は4名である。その後しばらく交代はなく、トンベツホと「十二<sub>7</sub>ヲクルマトマナイ」及び「十二<sub>37</sub>チノミ」で馳走を受けている。

次に「十二<sub>39</sub>チノミ」から「明日の役割を致すに、トセツ、アエリシテンカ明日は休息する様、イコレにも明日よりシヘツ見分済まで休息を致させ、トキコサンは明日一日上え行其より明後日より休息して、其帰るさ、またナヨロに不レ居候様に定め、明日左候に附ラフニ、トキコサン、エシヨカンテの三人にて上る由申し聞下巻しぬ」(秋葉翻刻：下巻82)とし、ラフニ、トキコサン、エシヨカンテの3名が同道。また、3名とナイフトに着くと「然るにアエリテンカ、トセツも昨朝下りて此処にて休息しぬが」(秋葉翻刻：下巻89)とし、ナイフトの馳走は、ラフニ、トキコサン、エシヨカンテ、アエリテンカ、トセツの5名が受けている。

その後、第13巻1丁では「トキコサンとラフニの兩人に暇遣し、是よりアエリテンカ、トセツ、エシヨカンテの三名を水夫として」(秋葉翻刻：下巻103)とある。ヲニサツへには、この3人が同行している。

一方、記述によると熊の急な到来をトキコサンが伝え、彼と武四郎が連れていたアエリテンカ、トセツ、エシヨカンテ4名とアヘシナイのイソカ、儀式準備にエコレフも参加している。そのため、彼等のうちトキコサン、エコレフを加え、アエリテンカ、トセツ、トキコサン、エシヨカンテ、エコレフの5名が同行した側に数えられる。

## 3 同行者の構成と料理の差

全体の人数を見ると食用の際に同行しているのは、4人から6人である。同行者のなかには、

エンリシウ、ニホウンテ、シリアイノ、セツカウシ、シリコツ子、クウチンコロの6名は乙名、トミハセは小使などと各地の役職持ちが含まれる。

このような人物の在非での待遇差は、表を見ていただくと分かるように、ないといえる。若干1例ほどトンベツホで、武四郎にはトレフ餅を出し、同時に武四郎及び同行者に「また歎冬とアンラコロを煮てチエトイを接え鱒の卵を入れて」という料理も出す例を見るのみである。

### Ⅲ 家族構成について

#### 1 石狩川流域の人別の詳細

紹介した史料では、人別との差異や出稼ぎ状況、故人となった人物を指摘するなど事細かである。以下、何度か年齢を使用したり、家庭状況から考察を補完する点から、指摘しておく必要もあり、いくつかの点を確認する。なお、引用以外の年令は武四郎の使用した人別が前年のものであるため「1」を足している<sup>3</sup>。

ベツバラでは「去年召連しシノロ乙名エンリシウ五十九才の家なるよし。然しエンリシウは当春死去したる由にて、家には妻カトアンテ五十才と三男シユケシアイノ十四才、妹タマアンテ九才三人にて、エンリシウの母タマルコ七十四才と云盲目の母を養ひ居たり。」とし、倅つまり長男のイナオカントリ 32 才、その妻シトルンカ 31 才、次男イソシユイ 22 才については「何れも浜え下られ雇を致させ有よしにて」（秋葉翻刻：234）と、働きに出ている。

ベ、ツフトでは「クウチンコロの家迄下り止宿するに」とある。構成は第6巻5丁「フシコベ、ツ」において「家には妻ヲホロヘケと二男ムシユサマに僕婆のシユウタレというものと四人居合したり」（秋葉翻刻：269）とあり、クウチンコロは武四郎に同道中のため、妻と次男とウタリの老婆3名がいた。

ホロソウは「是よりシリコツ子家え寄りしが」（秋葉翻刻：277）とあり、第6巻18丁末から19丁にある「ベツチウシ」の解説或は、第3巻30丁の人別に家族構成が見える。後者では「先第一当初の乙名シリコツ子三十七才、妻トシユサン十七才と帳面にあれども左様にはあらず。妻はハルウクシと云もの也」（秋葉翻刻：173）とある。シリコツ子も同道中のため、その妻1名のみがいた。

ホンメンは、第6巻37丁に「家主はトクヒタ小使シレアエノ二十五才、妻エンカルマツ二十才、妹ミ、タラ十九才と三人住せり。」（秋葉翻刻：287）とあり、シリアイノも同道中で、妻と妹の2名がいる。

アサカラでは「扱此の家主はタサウリと云六十二オトクヒラの脇乙名を勤め居るよし也。妻はヤエコトム五十八才と云しが、去年冬死したりと。その娘タマルキ三十五才は是も当春死し、倅ニホウンテ三十一才にトメノコ云妻を迎えたりしが、未だ其トメノコは此方え引取らず有とかや」（秋葉翻刻：305）とし、3名がいる。

ハンケホロナイではセツカウシの家まで行き、人別は第4巻17丁「カバト」及び同巻32丁「トツク」現地の解説にある。前者では「セツカウシ二十九才は、家トツクに住し妻ウエテマツ二十一才との中に子供壱人有」（秋葉翻刻：204）とし3名居住。だが32丁では「母イルカマツと妻と当才の子供一人に、妻の妹と四人住したり」（秋葉翻刻：212）とし、妹コセレハレがいる。

#### 2 天塩川流域の人別の詳細

ヲクルマトマナイは第12巻8丁末から9丁で「家主は（中略）名はエカシテカニ六十八才、

元は北海岸シヤリ領の者の由。妻はテケモンケ三十八才と云う。」(秋葉翻刻：下巻 66) と、省略するが子供が 10 人いて浜へ雇いに出ている 2 名を除く、7 名が居住している。

チノミは、「2」で見たように 2 人がいるのみである。ナイフトは第 12 巻 29 丁に「家主はシケロク三十五才と云、妻はモレワレ廿七才と兩人住せり。」(秋葉翻刻：下巻 77) と、2 名である。さらに再び訪れた「十三\_33 ヲクルマトマナイ」では、「妻は我を待ち受けてトレフを晒し居、トワヌは此間より我が帰るをまちて鱒を多く焼て置し由」(秋葉翻刻：下巻 122) とし、トワヌはエカシテカニの倅であり、そうすると妻はテケモンケである。

最後のヲニサツへは、「ヲニサツへなるトキノチ家え着しぬ」とあり、トンベツホと同様にトキノチの家である。また「アヘシナイよりイソカといへる爺も我を出迎えてがてら来り居たり」とし、儀式準備も参加しているため、食事もともにしたと考える。

全体的に説明したなかで、2 つほど疑問の残る例がある。1 つはベツバラで、もう 1 つは「十二\_47 チノミ」である。前者の不明点は「又此家よりもトレフを煮て我に出し」という記述での「此家」である。他家の人別が入り、一見その家が提供したと思えるが、「此家」は、シノロの乙名エンリシユの家とした。

その理由は第 1 に「上陸して宿す。その家は去年召連しシノロ乙名エンリシユ五十九才の家なるよし。」(秋葉翻刻：234) といい、この日の宿が同家であること。加えて、トレフの記述の前に出てくる小使イソランの家の説明とは、「扱」という言葉で区切られ、宿泊先である乙名エンリシユの家での話題へと移行していると考えからである。

もう一つは「十二\_47 チノミ」に「チノミのエレンカクシの家え着しぬ。左候や婆とイソマの娘と兩人にてまたトレフ餅を作り出し」とあることである。イソマはヌタベトに「家主はイシヲマ四十才、妻ハルラン五十五才、甥アマ、十七才と居るよし帳面に有り」と人別があるが娘は確認できないためである。

前回は紹介したように、ここではイシヲマの家は家主は川守りで、アマ、も雇で浜へ、ハルランもオオウバユリ採集でいない(若林 2005:37-52)。この状況から「娘」は、イシヲマ妻ハルランと推定する。

### 3 状況と構成の詳細

以上、馳走した家庭の状況は出稼ぎに出る家族なども多く、病臥するサケノのような人物もおり、さまざまである。

全体を見ると名前は重複を除き 44 確認できる。これから亡くなったエンリシユ、同道中のクウチンコロ、シリコツ子、シリアイノを除き、ハルランとイソカについては一時的な訪問と考え、30 名が実際に居住する。このうち半数を超える 16 名が成人以上の女性で、20 歳以下は 9 名いる。その他年齢が分からない人物或は成人男性が 6 名がいることがわかる。ここからは、数人の来訪者を迎えるに当たり、女性や子供と少数の男性でそれを迎え入れていることが伺える。

## IV 調理者の性別について

### 1 調理者とその準備

その上で、調理者を特定できるのは屋内 4 例、屋外 1 例である。表では、野宿調理との観点から屋外の「八\_31」は別記している。



さらに準備の描写は、4 つある。ヲニサツへの「妻ケセ、とサケノはトレフ餅を拵え」、アサカラの「其ニホウンテが此間より我が来るを待得居て用意せしと云まゝ」、ヲクルマトマナイの「妻（テケモンケ）は我を待受てトレフを晒し居」である。これらに加え、野宿に際し、シリアイノが「彼トレフを取集め、其夜は是を飯料に用ひ」（秋葉翻刻：353）という例がある。

供し方は、唯一「十二\_49 チノミ」にある。「婆とイソマの娘と兩人にてまたトレフ餅を作り出し、又フイといへる草の根を湯上、其傍に鱒のハラを置いて我に出しぬが、其味至て淡薄にて妙なり。」という。

## 2 調理者の性別

屋内の調理で特定できる 7 名は、男性ではニホウンテ、サケノ、シリアイノの 3 名、女性ではケセ、エヌンベケレ、テケモンケ、ハルラン 4 名である。特に調理を行う男性には、他の家族の状況とは違った特殊性が認められる。

まずアサカラのニホウンテの家は、相継いで成人女性が亡くなっている。家主で脇乙名のタサウリの妻ヤエコトムは冬に、脇乙名娘タマルキが春に自身の娘シャウシンテを残し亡くなり、ニホウンテは事実上独身である。つまり、主人と息子そして、タマルキの娘シャウシンテの 3 人で暮し、タマルキは調理を行うのには幼いため、彼が煮炊きをしているようである。

サケノの場合は、ヲニサツへの儀式用トレフ餅の調理を行っている。他の男性が行う準備に参加しないのは、病臥しているため材料の採取や加工ができないからと想像される。また、武四郎の同行者なども含め人数が足りており、逆に調理を行う者がケセ、のみという状況からとも考えられる。シリアイノの場合は、男性のみで構成される一行の野営にあたっての食事として、その場で採集と調理を行っている。

以上のことから調理には、ニホウンテ、サケノの 2 例から日常的にも、儀礼的な場でも、シリアイノの例からは野外でも必要な状況下では男性が調理するとわかる。

## V 各地での調理方法について

### 1 具体的な調理法特定の困難さ

その一方で詳細な調理法は簡潔な表記からは、読み取れない。これは、準備や調理、提供方法の記述が簡素で、「一同振舞はれ」や「我には召連るものにも皆トレフ餅を出し振舞、いと町寧に世話致し呉ぬ」といったものであることに起因する<sup>4</sup>。その上で全体を見渡すとベツバラのように「煮る」例と、ホロソウのように「トレフ餅」の例がある。双方 5 例あり、不明 2 例と「煉る」1 例以外の大半を占める。

指摘したように「煮る」例では、フシコベ、ツとアサカラに特徴がある。前者は「トマ、トレフ、アンラコロ等を煮て出し」と混合を行い、3 種の植物を扱う。後者は「アンラコロとトレフとを煮てチエトヒを入れてねりし食物」と前者と共通する植物とチエトイ（食土）を混合する。加えて、「煉る」（ねる）という表現には、ただ「煮る」と書かれたものとの区別が見られ、差異が存在するようだ<sup>5</sup>。

### 2 調理時のオオウバユリの状態

そこで問題なのは「トレフ」とされるものが、乾燥した保存加工済みの状態か、或は生に近い状態なのかである。この判断が問題となる原因は記述の時期が採集時期と重なることにある

(若林 2005:37-52)。さらにいえば調理準備が示唆されている、ニホウンテやテケモンケの「用意」や「晒し居」が、どちらを使用したかという問題でもある。

記述からは若干前者の方が時間があるようだが、準備期間は明確ではない。時期が6月末とのことから生の可能性が強い。後者の場合は、既に保存処理の済んだものを調理のために必要な「晒し」をしていたというのが適当ではないだろうか。

それには3点、理由がある。第1に前回で述べた処理は、採集現場で行われていると同えること。第2に8月前に大量の採集処理が可能であること。第3に、前回示したようにテケモンケは「当春」に処理を終えているためである(若林 2005:37-52)。これは保存処理されたものを調理のため準備する描写だろう。

では、他の事例はどうだろうか。「トレフ餅」の例は、その材料が澱粉質と考えられることから除外する。それ以外のトレフを「煮る」例では、時期がそれを左右しているだろう。

その上でベツバラ、ベ、ツフト、ホンメンは、6月中旬から下旬で、ナイフトは8月初旬とある。前者は生の可能性が強く、後者は保存品の可能性が強い。つまり、トレフ餅のように特定の成分を調理しないので、野外での調理例と同様に、全体の使用が可能で一時的に必要な量を取りまとめるなら採集も可能と見ることもできるからである。加えて、訪問であるホンメンや時期の若干遅いナイフトでは、採集する時間や時期から、生ではない可能性が強い。

### 3 「トレフ餅」の供物としての使用と調理における家長年齢との関連

さらに「トレフ餅」の例では、人の食べ物以外の機能が伺える。「I」で見たようにヲニサツへでは、熊送りの際に拵えられ、供えられている。それは附図で確認でき、「トレフ餅」と注が付され、熊の前に置かれている(秋葉翻刻:4)。つまり、トレフを主体とした餅状のものが、胆振日高地域の粟等の餅と同列で扱われている興味深い事例である。

しかし、比較例がない。トレフ餅の使用がどのようなものなのか判断できず、急な熊の到来でもある。安易な一般化は避けるべきであろうが、儀式的供物を考える上で注目に値する。

さらに、調理方法に上下の価値観或は、構成する者の年齢などによる差を考える上で、興味深い事実を見つけた。表を見ていただくと分かるように、65歳以上の家主がいる家では、武四郎が粥を作らせて馳走したエカシテカニの家庭を除き「トレフ餅」が提供され、その他は「煮る」調理がとられている。これは来訪者への食事に世代的な認識の差があるか、来訪者への対応方法が複数存在するかどうかだろう。また、調理方法と季節からは、8月以降にトレフ餅が65歳以上の高年齢の家主を持つ家族で増加するのは、処理の最盛期を過ぎていることも関係しているだろう。

### おわりに

前回も含め、総括すると以下ようになる。

安政4年、5年の蝦夷地の特に天塩、名寄周辺と旭川、深川周辺で、オオウバユリの採集、保存処理、調理方法、という点を、松浦武四郎の著作から考えて来た。

採集は、居住地から一定の距離を置き、核家族から2、3家族10数人の規模のさまざまな単位で行う。他方、大規模な採集現場では、共同作業及び採集処理後の分配は散見されない。保存処理については、記述が少なく細かな工程は明らかではない。だが、前後に何らかの作業があり、「つきつぶす」事自体は明確で、処理の存在は確認できた(若林 2005:37-52)。

調理は、詳細な道具、調理方法、食用に際しての作法などについては判明しなかった。明

確なのは調理は、儀礼の場面、日常の場面を問わず、状況により男性も行う点である。また混合を含む「煮る」と「トレフ餅」と提供するものの大多数をしめる。来客への提供には、乙名層と普通の家庭でも差はない。一方、家族を構成する人物の中に一定の年齢以上の存在が、提供するものを左右しているようであることは興味深い。さらに「トレフ餅」は、儀式上の供物として使用されている。今回垣間見られたのは、以上のような状況であるといえる。

[注]

- 1 前回、各地域の解説者を紹介したが、今回は食用事例を扱い、それが武四郎自身の体験に基づく記述であるため割愛する。
- 2 ここは、トキノチの家で馳走となっているが、p.123「第十一巻天之穂日誌 二」トンベツホ 48 丁 p.502 に「此処をヘンケオニサツへとも云」とあり、同地である。
- 3 「凡例」4 丁 p.60 に「（一年前の人別を使用している旨説明があり）依りて当年七拾才とせば必ず七十一才、六十才とせばかならず六十一才なるべし。」という。
- 4 若干以下で扱うが、例えば、量や器、膳の使用、出す順番、誰が出すのかは不明である。こういった言及がないのは武四郎の目的が文化の調査ではないことが影響しているだろう。
- 5 これらに類似する調理方法は、近代例でサハリンアイヌのものが知られる（例えば知里 山本 大貫 1979:pp.72-75 及び知里 1953:p.196, pp.202-204）。しかし関係性は不明で、もしかするとこういった方法が一般的だったのかもしれない。
- 6 この議論は小樽商科大学言語センターの大島稔教授の御指摘に基づいたものである。また残りのアサカラとハンケホロナイ（トツク）については、生であろう。

引用参考文献 ※（ ）内は初版年数。

小林和夫

2001（1982）「丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌足跡図」『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』付図  
知里真志保 山本祐弘 大貫恵美子

1979「第一章コタンの生活 五 野草採取 野草の処理」『樺太自然民族の生活』相模書房 pp.72-75  
知里真志保

1953「第一巻 植物編」「オオウバユリ」「クロユリ」『分類アイヌ語辞典』日本常民文化研究所彙報  
第 64 p.196, pp.202-204

野島寿三郎編

1987「安政 4 年（丁巳）」『日本暦西暦月日対照表』紀国屋書店 p.276

松浦武四郎著 高倉新一郎校訂 秋葉実解説

2001（1982）『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』上下 北海道出版企画センター  
松浦武四郎著 秋葉実翻刻

2004『巳手控一〜七』松浦武四郎選集 5 北海道出版企画センター

若林和夫

2005『丁巳蝦夷東西山川地理取調日誌』に見る安政四年のオオウバユリ採集とその周辺『北海道民族学会会報』創刊号 pp.37-52

（わかばやし・かずお／北海道民族学会会員）

表 『門日誌』における食用記述の所在と関連事項

記述箇所	時期 (西暦)	場所	同行者	馳走された側	調理方法	馳走した側の家主と家族	畑
五_5	1857年 6月15日	ベツバラ	トミハセ、ニホンテ、アイラ ンケ、セツカウシ	武四郎(同行者は不 明)	煮る	シノロ乙名エンリシユ(生きてい れば60才)	乙名妻カトアントンテ 51才、乙名母タマルコ 75才、シユケシアイノ 15才、タマアン テ 10才(乙名は故人)
六_17	1857年 6月21日	ベハツフト(フ シロベバツ)	シリコツ子、クウチンコロ、 ハリキラ、イナアラニ	武四郎及び同行者	煮る	下サツホロ乙名クウチンコロ 42 才(武四郎に同行中)	妻アホロベケ 36才、二男ムシユサマ 16 才、婆シユウタレ
六_29	1857年 6月22日	ホツソウ(ベ ツツウシ)	シリコツ子、クウチンコロ、 ハリキラ、イナアラニ	武四郎及び同行者	トレフ餅	上サツホロ乙名シリコツ子 38才 (武四郎に同行中)	トシユサン(ハルウクシ) 18才、ヤイル
六_34	1857年 6月24日	ホンメン	ピヤトキ、シリアイノ、イワ ンハカル、トミハセ	武四郎及び同行者	煮る	上川乙名シリアイノ 26才(武四 郎に同行中)	妻エンカマルマツ 21才、妹ミ、タラ 20才
七_5	1857年 6月25日	アサカラ	ピヤトキ、シリアイノ、イワ ンハカル、トミハセ	武四郎及び同行者	黒百合とオオウバユリ を煮て食すと混合	トクヒラ脇乙名タサウリ 63才	●倅ニホウウンテ 32才、シヤウシンテ 10 才(タサウリの死んだ娘タマルキの子 供)
九_30	1857年 7月7日	ハンケホロナ イ(トツク)	トミハセ、タヨトイ、ニホン テ、シリアイノ	武四郎(同行者は不 明)	焼る(煮つつ潰したも のか)	トツク乙名セツカウシ 30才	乙名母イルカマツ、妻ウエテマツ 22才、 赤子一人、妻妹コセレハレ 20才
十一_48	1857年 8月1日	トンベツホ	アエリテンカ、トセツ、エコ レフ、トキヨサン	武四郎	トレフ餅	トキノチ 66才	妻カセ、62才、倅サケノ 35才、ホント セツ 4才
十二_7	1857年 8月3日	ヲクルマトマ ナイ	アエリテンカ、トセツ、エコ レフ、トキヨサン	武四郎、同行者及び エカシテカニ家族	粥に鱈の卵とともに入 れて	エカシテカニ 69才	妻アケモンケ 39才、倅トワンス 13才、 イカシロン 8才、カニヒ 6才、アヨホ シ、シベサレ、チエベカリ
十二_37	1857年 8月5日	チノミ	アエリテンカ、トセツ、エコ レフ、トキヨサン	武四郎及び同行者	トレフ餅	ナヨロ乙名エレンカクシ 70才	乙名妻エヌンベケレ 59才、ラフニ 40才
十二_49	1857年 8月7日	チノミ	トキヨサン、エシヨランテ、 ラフニ	武四郎及び同行者	トレフ餅	ナヨロ乙名エレンカクシ 70才	●乙名妻エヌンベケレ 59才、ラフニ 40 才、●スタベトのイシヨマ妻ハルラン 41 才?
十二_51	1857年 8月7日	ナイフト	エシヨランテ、トキヨサン、 ラフニ、アエリテンカ、トセ ツ	武四郎及び同行者	煮る	スケロク 36才	妻モレワレ 28才
十三_33	1857年 8月13日	ヲクルマトマ ナイ	アエリテンカ、トセツ、エシ ヨランテ、ラフニ、トキヨサ ン、エコレフ	武四郎及び同行者	方法不明	エカシテカニ 69才	●妻テケモンケ 39才、倅トワンス 13 才、イカシロン 8才、カニヒ 6才、ア ヨホシ、シベサレ、チエベカリ
十三_35	1857年 8月14日 (ホ)	ヲニサツヘ (トンベツ ホ)	アエリテンカ、トセツ、エシ ヨランテ、トキヨサン、エコ レフ	熊を送るための供え 物として作られたた め不明	トレフ餅	トキノチ 66才	●妻カセ、62才、●倅サケノ 35才、ホ ントセツ 4才、アベシナイ爺イソカ
八_31	1857年 7月6日	クウカルウシ	シリアイノ、セツカウシ、タ ヨトイ、ニホンテ	武四郎及び同行者	方法不明	●シリアイノ 26才	

※松浦武四郎著 高倉新一郎校訂 秋葉実解説 2001(1982) 『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』上下 北海道出版企画センターより作成